

立命館大学理工学部 正会員 笹谷 康之

立命館大学理工学部 学生員 ○幸場 喜郎

### 1. はじめに

本来、場所はそれぞれに固有の意味をもった空間であった。<sup>1)</sup>特に集落という境域によって区切られた空間では、それ自身で一つの世界を築いていた。しかし、高度経済成長期以降、意味・価値を見失った場所は大地に根を張らない浮遊の空間となり、秩序ない開発によって本来の美しい農村景観を混沌とした空間に変貌させている。

そこで本研究では、神奈備山である三上山と御上神社を有する三上集落を対象に、農村集落において本来場所が持つ固有の意味を解析するために民俗空間の構成とコスモロジーを明らかにし、場所が持つ固有の価値を示すことを目的とする。

### 2. 研究の方法と調査対象地の概要

歴史的資料<sup>2)3)</sup>から地名、地形、集落の慣習を収集し、その後、聴き取り調査を行った。そして、GISを用いて①土地利用形態による空間構成、②小集落組織による空間構成、語彙素分析から③地名による空間構成の以上3点の分析を行った。

調査対象地は、神体山である三上山を集落内に要し、その山裾に広がる野洲町三上区を対象とする。市街地近郊に位置しているものの農村集落としての面影を残し、その伝統的文化は引き継がれ、慣習は維持されている。また、民俗学分野では非常に注目されている地域であり、その空間の保全が望まれていることを理由に、本集落を選定した。三上集落における小字数は50件、三上山通称地名は54件であった。

### 3. 土地利用形態から見る民俗空間構成

本項では、昭和35年測図の地形図を用いて本集落の土地利用形態を明らかにした。集落空間を小字ごとに「居住域・生産域・聖域・境界域」の4つの面的要素と「水系・道路」の2つの線的面素とに分類を行い左図1の領域モデルを示した。三上集落は、三上山のミミヤマと

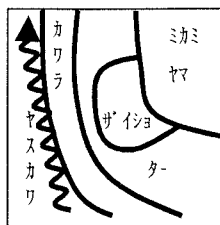


図1 領域モデル

野洲川のヤガリ、その中心に御上神社を中心とした集落のガイジョ、その周りに田・畑地のタが広がり、野洲川沿岸部には堆積平野・開拓地のカガが広がる空間構成を持つことが明らかになった。

### 4. 地名から見る民俗空間構成

集落の小字、三上山の通称地名の語彙素分析を行い、集落の空間認識を把握するとともに、地名が持つ諸特性から空間構成を明らかにした。

#### 4-1 語彙素分析

まず、小字をその構成する語彙素に分割し、その語彙素のもつ性質について分析を行った。本集落においては、三上山との関係性を明らかにするため、語彙素のカテゴリーに「三上山」「御上神社」を設置した。その結果、三上集落(語彙素総数106)では、17のカテゴリーに分類することができ、そのうち三上山に関する語彙素は2.83%、御上神社は7.55%、その他の信仰に関する語彙素は8.49%となった。三上山を信仰に関する語彙素と捉え御上神社を含め、この3つのカテゴリーをすべて合わせると全体の18.87%と、三上集落では信仰が非常に強く認識されていたことが明らかになった。

#### 4-2 地名語彙の諸特性に見る小字の相互関係

小字の語彙素分析から得られた結果のうち、位置、信仰(三上山・御上神社を含む)のカテゴリーに該当した語彙素に注目し、場所が持つ意味、場所の価値、そして小字間の諸特性を明らかにした。まず、位置に関する語彙素から場所相互の位置関係をどのような基準で認識していたのかを明らかにした。その結果、本集落では野洲川の流れによる上流を上(上)、下流を下(下)とする軸と、御上神社から北東を内、南西を外とする軸が存在することが明らかになった。これを、三上集落における上下軸と内外軸と設定し集落の定位モデルとして示した。

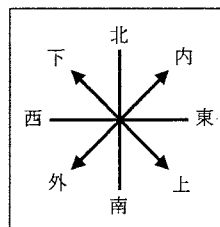


図2 定位モデル

次に信仰に関する語彙素を持つ小字の配置を見ると御上神社を中心として、位置の語彙素から得られた定位軸に準じて広がりを見せている。また、信仰に関する語彙素を持つ小字は内外軸と設定した内側にのみ存在し、外側には存在しないことが明らかになった。

また、三上山の通称地名の語彙素分析から、信仰に関する語彙素を持つ通称地名は三上山の西側斜面に集中することが明らかになった。西側斜面は本集落から三上山を望める方角であり、三上山は官有地であったがその西側斜面は、昭和23年以降御上神社の境内として払い下げられている。

## 5. 小集落組織から見る民俗空間構成

本項では祭祀、檀家、墓、講の各組織から、本集落に点在する山出、東林寺、前田、小中小路、大中小路の5部落の関係性を示すとともに、各組織による空間の意味付けを明らかにした。

本集落では、部落ごとに寺院を配し墓、檀家共に部落ごとに独立した組織形態を持っていることがわかった。講に関しても一つの例外を除き部落ごとに行われている。しかし、祭祀に関しては春の例祭、秋季古例祭、山上祭共に部落を越えた組織を持つことがわかった。秋季古例祭に関しては5部落で平均的に長之屋・東・西の宮座に配分されている。しかし、春祭に関しては、大宮先陣を前田・小中小路・大中小路、大宮後陣を小中小路・大中小路、若宮を前田・小中小路・大中小路、十禪師を東林寺・山出と前田・小中小路・大中小路、大中小路、東林寺・山出と完全にその役割が分かれている。

ここで、各組織から得られた部落間の関係を本集落における部落間構造として、結節モデルを図に示した。

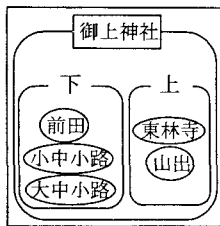


図3 結節モデル

また、墓制から集落内の忌地の特定を行い、三上山、御上神社をハレ、墓所をケガレ、その他の空間をケとする空間配置より、

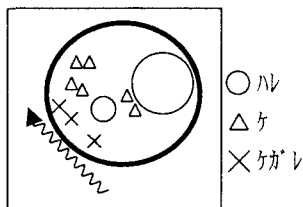


図4 ハレ・ケ・ガレモデル

集落におけるハレ・ケ・ガレモデルを図示することができた。

## 6. 集落のコスモロジー

上記の領域モデル、定位モデル、結節モデル、ハレ・ケ・ガレモデルを統合すると図5の本集落におけるコスモロジーの概念図となる。本集落は、神社の周りに居住空間が点在し、その周りを聖域、忌地、生産域によって囲まれている。内外軸、上下軸によってその境界を区分する事ができる。聖域は三上山全体を指し、それに沿う集落は聖域への入り口となる。また、その居住域は祭祀等、時節において御上神社あるいは三上山の神への斎場となり準聖域としての価値をもつ。神社を挟んで聖域とは逆側に位置するのが忌地である。忌地は野洲川沿岸部に集中し古来の自然堤防によって俗の空間から隔離されている。生産域は対角線状に2つの耕作地が広がっている。概念図における左側の生産域は集落内において内として認識され三上山の正面に位置している。それに対し右側の生産域は外という認識で野洲川による堆積平野で左の生産域よりも後に人々によって開墾された耕作地である。

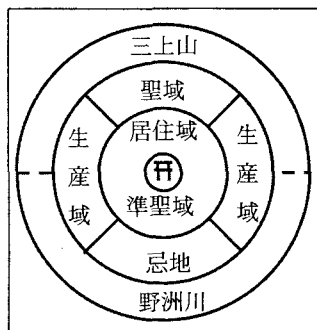


図5 コスモロジー概念

## 7. おわりに

本研究は、集落内に神体山を有する独自の民俗空間の把握に特化した研究であり、以下の4点が明らかになった。①土地利用形態から三上集落を三上山の山頂、野洲川のヤカリ、集落のザイヨ、耕作地のケ、河岸のケの5つの領域で表すことができた。②地名が持つ諸特性から三上集落では、上下軸と内外軸の2軸が存在することが明らかになった。③祭祀などの各組織から三上集落では、東林寺・山出の上集落、前田・小中小路・大中小路の下集落として認識されていることが明らかになった。④祭祀、墓制から三上集落は、御上神社・三上山のハレ、忌地のケガレ、部落・耕作地等のケの空間が存在することが明らかになった。そして、以上の4点から本集落におけるコスモロジーの概念図を導き出すことができた。

## <参考文献>

- 1) 『地形の意味に関する研究』1990 笹谷康之
- 2) 『三上山管理関係資料-「新三上山誌」として-』1995 三上区
- 3) 『明治村絵図-古絵図集成1-』1986 野洲町